イ、拔き技が、小さく速くなると、捲右籠手擊に類似して來る。

ロ、理合としてよい技であるが、手の裡の練習が大切である。

正面擊ニ對シ拔胴擊

（一）要領

(1) 對手が正面に擊ち込み來るに對し、此方は自分の身體を對手に打ちつけるやうな氣持にて右足より鋭く斜右前に踏み出し乍ら、切尖が左に圓を描くやうに刀をかくし、摺り違ひざまに對手の胴を擊つ。

(2) 左手を右手に近寄せると手の返りが良くなり、自然に双筋が正しくなる。

（二）注意

拔き胴擊は斜右前に體をかはし、對手に空を切らすのであるから、初心の場合は、體を轉はすことと、胴擊を擊つこととを分けて授けると良い。

正面擊ニ對シ右ヨリ摺上正面擊

（一）要領

(1) 正面に擊つて來るのを、體を退くと共に自分の刀の左の鎬を以て對手の刀を摺り上げ、其の儘直

ちに正面を擊つ。

(2) 對手の擊ち込んで來る體勢によつて、體の退き方に相違がある。深く踏み込んで來れば、此方も十分に退き、若し淺く來れば此方も僅かに退いて物打を用ひて擊つ。

(二) 注意

イ、摺り上げるのと擊つこととが一拍子になることが大切である。

ロ、間合の如何に拘らず、物打で擊つことを忘れてはならぬ。

正面擊ニ對シ左ヨリ摺上正面擊

(一) 要領　正面に擊つて來るのを體を稍左後方に退くと共に、此方の刀の右鎬を以て左から摺り上げて直ちに正面を擊つ。他は前項の要領と同じである。

(二) 注意

手の裡に冴えがないと擊ちが弱くなり勝である。手左を特にしめ必る要がある。他は前項に同じ。

右籠手擊ニ對シ摺上右籠手擊

(一) 要領

(1) 對手が右籠手に擊來ると、手元を僅かに右上に掬ひ氣味に上げ、刀で右上に弧を描くやうに、右

の鎬にて摺り上げる。

(2) 對手の刀は右下に流れて臂が伸びる。そこをすかさず右籠手に擊ち込む。

(3) 對手の踏み込みの深淺によつて此方の體勢を加減しなければならぬが、原則としては摺り上げると共に右足から左斜後に體を開き、直ちに右足から踏み込んで右籠手を擊つ。

(二) 注意

此の擊方は至極機敏の動作を要し、摺り上げるや否や擊込むことが肝要である。摺り上げて更に刀を振り上げて擊ち込むやうでは機を失する。

正面擊ニ對シ左ヨリ摺上右籠手擊

(一) 要領　前項の要領に準ずる。唯、對手が正面に擊込んで來るのを左から高く摺り上げて伸びた右籠手を擊つ。

(二) 注意

手元が高くなつて居るので、十分手の裡をしめないと擊ちが呀えない。

右胴擊ニ對シ切落シ面擊

(一) 要領

(1) 對手が右胴に擊ち込み來るのに對し、左足より斜左後方に體を退き、對手の刀を切り落すと共に直ちに面に擊ち込む。

(2) 場合により切落して右籠手を擊つことも出來る。

(二) 注意

右胴擊に對する應じ技は多くない。故に十分熟練する必要がある。

右(左)面擊ニ對シ應面擊

(一) 要領

(1) 相手が右(左)面に擊つて來るのを、左足より斜左(右)後に體を開き、此方の刀にて其の擊に應じて直ちに面に擊ち込む。

(2) 應ずるには刀を立て、右(左)體側に沿ひて體に近く引つけるやうにして應じ、其の反動ですかさず面に擊ち込む。

(二) 注意

イ、頭を正しく保ち、手頸を柔かに使はなければ技が正確に施せない。

ロ、相當高尚な技であるから低學年には困難である。

正面擊ニ對シ左(右)ニ應返シ面擊

(一) 要領

(1) 左に應じ返して擊つ場合は、相手が正面に擊つて來るのを、左足から體を左に開き乍ら、刀を稍右斜にして右の鎬にて應じて受け流し切先を左に返して面を擊つ。

(2) 右に應じ返して擊つ場合は、之れと反對に右足から體を右に開き乍ら、刀を稍左斜にして左の鎬で應じ返して面を擊つ。

(3) 左に應じ返す場合には右籠手を擊つことも出來る。

(二) 注意

イ、相手の擊ち込み來る力を利用して應じ返す。

ロ、左右の手を近寄せると手の返りがよい。

ハ、左右の手の裡がやはらかでないと困難であるから十分練習を要する。

ニ、初めの間は、體勢が崩れ易いから體の開き方から練習しなければならない。

ホ、初めの間は大きく練習し、熟練するに從つて小さく敏速に一氣に應じ返すやうに要求する。

右籠手擊ニ對シ左ニ應返シ右籠手擊

（一）要領

(1) 正面擊に對して左に應じ返して面擊の前項の要領に準ずるのである。

(2) それよりも手元に近いところで、僅かに手元を上げ切尖を下げ、切尖が小さい圓を描くやうに一氣に應じ返して右籠手を擊つ。

(3) 應じ返すと共に體を左に開いて擊つ。

(4) 場合により應じ返して正面を擊つことも出來る。

（二）注意

イ、右籠手に擊ち込んで來た對手の力を利用し、そのはづみで應じ返す。

ロ、瞬間的技術であるから敏速を要する。

正面擊ニ對シ應返シ右胴擊

（一）要領

(1) 相手が正面に擊ち込み來るを、此方は斜右前に右足を踏み出すと共に、手元を上げるやうにして左の鎬にて應じ返し双筋を立てて右胴を擊つ。

(2) 間合が遠い場合は、左足を踏出して距離をつめ右足で右胴を擊つ。

（二）注意

イ、應ずるのと擊つのと別々になつては良くない。應ずると擊つことが一拍子にならなければならない。言ひ換へれば右胴を擊つ動作の途中に應じ返すことになる。

ロ、左手を右手に近づけると手の返りがよい。

正面擊ニ對シ應返シ左胴擊

（一）要領　對手が正面に擊ち込み來るを、此方は斜右前に體を進める體勢をとり、手元を上げ切先を左にして右に應じ返すと同時に斜左後に體を退くと共に双筋を正して左胴を引き氣味に擊つ。

（二）注意

イ、體のこなしが十分でないと擊ちが弱い。

ロ、低學年には難しい技であるから多くを要求すべきではない。

右胴擊ニ對シ應返シ面擊

（一）要領

(1)　對手が右胴に擊ち込んで來るのを、刀の切尖を下にして右脇にとり、右の鎬で應じ返し、其のまま半ば振り上げて面を擊つ。

(2) 應じ返す時、左足を斜左前に出し、右足は之れに伴ひ、體を左に開き間合をはかり面を擊つ。

(3) 手頸と手の裡が柔かでないと見事に擊てない。

出頭突

(一) 要領　對手が面又は胴等に擊つて來る其の出端を此方は諸手にて刀を眞直に伸ばすやうに突けば、相手は自然に突き掛かる。

(二) 注意

恐怖心を去り、肚を定めて對手の擊突を心に掛けず突かなければ成功しない。

捲落シ突

(一) 要領、

(1) 對手の刀を右下或は左下に捲き落し、其の反動で刀を元の位置にかへし乍ら相手の咽喉部を前突の要領にて突く。

(2) 捲き落すには、手元諸共刀をやゝ上げて、對手の刀を持ち上げるやうにして手元を浮かせ力を拔かせる。

(3) 此方の刀の中程の鎬で、相手の刀に絡みつけて捲き落す。

(二) 注意

イ、捲き落すには左の手の裡を利かすことが大切である。

ロ、腰をきめ、腕は凝らないやうにし、右拳の位置は殆ど動かさなくて良い。

ハ、相手が擊突して來た場合にも應用出來る。

入レ突

(一) 要領

(1) 對手が突いて來た時、右足より體を後に退くと共に手を返し、刃を右にし、相手の刀を下に輕く抑へながら手元を體に近く引き、なやし入れる。

(2) 相手の突技を殺しつゝ技の盡きたところを踏み込んで鋭く突き返す。

(二) 注意、

イ、なやし入れる爲めに體を後方に退いた反動を利用して突き返すことを忘れてはならぬ。

ロ、對手の刀を上から抑へてなやし入れる時、互の刀が不即不離の狀態にあることが大切である。強く抑へれば抑て對手の刀が生きる懼れがある。

攻込ミ方

（一）要領

(1)「中段ノ構」の切尖を少し下げて相手の拳につけ、腹でもどこでも突き貫く位の充實した氣力を以て攻め込む。

(2) 對手は其の氣勢に押されて脅威を感じ、思はず構を崩し、切尖を亂して身を退くものである。

(3) 其の構の崩れたところを、聊かの猶豫もなく深く踏み込んで十分それに擊突を加へる。

鍔糶リ合ノ擊チ方ト應ジ方。

（一）要領

(1) 鍔糶り合の場合は徒らに擊突を急がないで、機會を見て適當なる擊突の間合をとり、物打を以て擊突することを考ふべきである。而も離れ際が勝敗の決する大切なときであるから、不用意に又無爲に離る可きでない。鍔糶り合から擊つには、誘ひ出すか、押しつくるかして對手の手元を亂し、其の隙に乘ずることが肝要である。

例へば對手の手元を押して見て、相手が之れに反抗して押し返すならば手元が上り肘が伸びるから、そこをすかさず左足から一歩後に退り乍ら右胴を擊つか、或は右足を大きく後に退き、左足前にて

體を左に開き左半身になりて右胴を擊つ。

又對手の手元を斜左前に押して見て、對手が之れに應じて反對に押し返すなら、その力を利用して自分は左足を斜前に踏出して體を左にかはしながら、刀を半ば振り上げて面を擊つ。或は此の力を利用して左足から一歩斜左後に退き乍ら右籠手を擊つこともある。其の他退き正面擊の要領で正面を擊つこともある。

(2) 對手の擊に應ずるためには、不用意に對手に離れられないやうに注意し、絶えず切尖を以て相手の咽喉を扼するやうに心掛け、手元を崩さず下腹に力を入れて相手の出方により何時でも相手の力を利用して、機を逸せず技を施し得るやうに心を構へて居ることが肝要である。

體當ト其ノ應ジ方

(二) 要領

(1) 體當の方法は擊ち込むと同時に少しく顏を左に向け、なる可く腰を低くし、右肩を出し、強く彈力あるやうに對手の胸に打ち當り、同時に柄を握つた兩拳を以て相手の顎に向つて掬ひ上げるやうに衝きとばすのである。

對手の體勢の強いものに對しては、斜右或は斜左から當れば一層有效である。

要は對手の重心を不安定にして體勢を崩すのが目的であるから、體當をすれば對手は衝き倒されまいとして何處かに隙の出來るものである。其の機を逸せず擊ち込むのである。

(2) 體當に應ずるには體をかはして之を避け、又は此方よりむしろ前進して對手の體當の效果の發揮しないうちに、腰を落して對手の體を掬ひ上げるやうに當る。卽ち逆に體當りをすることになる。若し對手の當りが強い時には右にでも、左にでも、自分の身體を稍斜にして應ずる時は凌ぎ易い。

刀ヲ打チ落シタ時ト落サレタ時ノ動作

（一）要領

(1) 對手の刀を打ち落したならば、對手に組みつく餘裕を與へず、すかさず擊ち或は突かなければならぬ。此の場合大きく刀を振り上げることなく、早く擊ち或は突くことが肝要である。若し擊ち損じたならば、組みつかれることを警戒し、強ひて組みついて來るならば、體を轉はし或は、外して對手の體勢の崩れたところを擊つ。

又對手が間合を切つて機を覗ふならば、此方は十分落ち着き、切尖を下げてジリ〳〵追ひ詰め機會を見て擊突する。

(2) 刀を落されたならば、すかさず對手の手元に跳び込み、組みついて刀の使用の出來ないやうにするか、落ちた刀を速かに拾ひ上げるかしなければならぬ。

組みつく機會を失つた場合は、驚き怖れることなく、間合を切つて落ち著いて對手の動靜を看視しつゝ機會を見て組みつく。

上段ニ對スル動作 上段の長所は、遠い間合から擊ち得ることであつて近くては不利益である。從て上段に對しては此の點が乘ず可きところである。又上段は唯擊ち下ろすより外に方法のないものであるから、突に對する警戒を必要としない、從て擊ち下して來るところに應じたり、摺り上げたりして擊つがよい。

(一) 要領

(1) 對手が上段に構へようとする途中の籠手、即ち上げ籠手を擊ち、又將に構へ終らうとする刹那、即ちまだ擊ち込む氣が充實せず、體勢が整はぬ其の機を逸せずして乘込んで擊ち或は突く。

(2) 左諸手上段に對しては、手元を少し上げるやうにして切尖を對手の拳につけ、或は咽喉を扼し乍ら間合を詰め、起りを小さく左籠手を擊つ。場合により右籠手、左右胴に變化する。

(3) 對手が面に擊ち下ろすならば、應じ返して左胴或は右胴を擊つ。

(4) 右片手にて左面に來れば、應じて面を擊ち應じ返して右胴を擊つ。

(5) 右籠手に擊ち下ろすならば、手元を稍高く摺り上げて正面を擊つ。

(二) 注意

上段の擊方は中等學校の教材として適當とは考へられない。故に唯之れに對する動作を述べるにとどめたのである。

下段ニ對スル動作　下段の構は對手を看視して其の出方に從つて變化する構であるから、之を無視して無暗に擊ち込んで行くのは危險である。

(一) 要領

(1) 對手を氣分で壓迫して居て攻勢に出る氣が見えたなら、對手の刀を氣にせず、其の上から乘り込むやうに臂を伸ばして眞直に强く諸手で對手の咽喉部を突く。

(2) 上から對手の內籠手を小さく擊つ。不十分の時は直ちに二段擊の要領で正面に擊つて行く。

(3) 對手が鋭く攻め込んで來るならば、體を右又は左に轉して、其の切先を外し乍ら、左面又は右面を擊つ。

三　形

形修行ノ目的

形は姿勢態度を正確にし、眼を明にし、技癖を去り、太刀筋を正し、動作を機敏輕捷にし、擊突を適確にし、間合を知り、氣位を高め、氣分を練る等劍道修行上極めて大切なるものである。

形修行上ノ注意

形を修行する上に於て特に注意しなければならないものは單なる形式に終つてはならないといふことである。勿論、定められた約束順序等に從つて一種の形式を踏むのであるけれども、其の內容としては旺溢せる氣分、潑剌たる精神を藏して居なくてはならぬ。斯て形は千變萬化の妙を感ぜしめ深遠なる意味を思はしめるのである。要するに緊張を缺いた枯死せる所謂「型」に墮ちないやうに注意しなければならぬ。

「太刀ノ形」「小太刀ノ形」

「太刀ノ形」「小太刀ノ形」は大日本帝國劍道形を用ふ。「太刀ノ形」は「小太刀ノ形」に對して名づけたもので一本目より七本目までのことである。「小太刀ノ形」は小太刀三本の名稱である。

大日本帝國劍道形は現在最も廣く行はれ而も割合に容易である。其の數僅かに十本に過ぎないけれども、之れを活用すれば幾本にも變化應用することが出來る。同時に實際の稽古に直ちに活用し得るやうに組立てられて居るから教授に當つては、その趣旨に副ふやう取扱はなければならぬ。

構

形の教授に際して一通り構へ方を授けるが良い。茲では大日本帝國劍道形の五つの構へ方即ち上段、中段、下段、八相、脇構に就いて說明する。

上段の構

（一）要領　「中段ノ構」をなし次で我が拳の下から對手の頭上を見下ろす心にて力を頭上に振り冠り、左足を前に踏み出して構へる。之れを「左諸手上段」といひ、右足を前に踏み出して構へた場合は「右諸手上段」といふ。片手上段と言つて右或は左片手で上段をとることもある。

（二）解說　此の構は正面から堂々對手を攻擊せんとする構であつて、我が刀が對手に達する距離最も近く、刀を振り上ぐるを要せず唯打ち下せばよい。尊嚴なる氣分を持し、心廣く體胖に敵を頭上より見下し、勇猛敵を呑むの意氣を以て臨み、敵の起る頭を押へ、出る端を擊ち、引けば付け入り何處までも氣を許さず押して行くのである。唯我が咽喉部をあけ、胴をあけ、足下をあけて構へるので堅

い守りではない。

從て少しでも油斷があると忽ち對手に付け入られる。技術に於ても精神に於ても飽くまで對手を呑み、威嚇壓伏して手も足も出すを得ざらしむるの自信がなければ此の構はとれない。

中段ノ構

（一）要領　切尖を對手の兩眼の間に着け、退つて一足一刀の間合に於て相手の咽喉部の高さに保ち、左拳は臍より約一握を隔てるやうにして刀を持つ。自然の體勢たる姿勢であつて正しく歩行する時の如く上體を眞直に保ち、兩脚は通常の歩幅を程度として踏み開き、右足を前にし左足即ち後足は踵を少し浮かし兩足の爪先に力を入れる。

（二）解說「中段ノ構」は別に晴眼（正眼、星眼、靑眼等とも書く）の構といふ。攻防共に安全確實、且つ自由自在な構であつて、如何なる動作を起すにも、如何なる變化に應ずるにも最も都合の良き最も有利な構である。

心を臍下丹田に納め、攻むるに逸らず遲れず、守るに固まらず臆れず、心を八方に廻らし、縱橫無盡に働き得るやうに保つべきである。

此の構は最も多く、最も廣く用ひられる大切なる構である。故に之れを常の構とも言つて、圍碁に

於ける定石に比するものもある。十分それに習熟することが必要である。

下段ノ構

（一）要領　切先を對手の膝頭の下一二寸のところにつける。其の他は「中段ノ構」に於ける場合に同じ。

（二）解說　此の構は我より進んで對手を擊たんとするのではない。切尖を下げて對手の足下を脅かし、對手の進擊を妨げ、我が守りを堅くし、對手の動靜に應じ自由に變化應接するのである。心は水の如く冷靜に流動淀みなく、刀を低くするも心を低くし對手を恐れるやうなことがあつてはならぬ。我が體の守りを完全にし、對手の出方によつて變化するのが此の構の主意である。

八相ノ構

（一）要領　刀を僅かに後方に傾けて立て右肩に引きつけ、右拳と肩とは略ゝ同じ高さに、鍔が口邊にあるやうに、左拳を水月の前にとり、左足前に踏み出して構へる。

（二）解說　此の構は一刀流の陰の構と柳生流の八相の構とを折衷したものであると言はれて居る。心は大木の樹立するが如く、泰然自若として對手の動作を看視し、對手によつては如何樣にも應接變化するのである。

脇構

（一）要領。刀を右脇に取り、切尖を後方にして斜下に向け、左拳を臍の邊りに置き、左足を前に踏み出して構へる。

（二）解說「八相ノ構」と同樣な心持で對手の擧動を看視するのを旨とする。黃金の光を秘したるにたとふべく、必要に應じて幾何とても取り出して用ふる如く、刀を對手に秘し、必要に應じて或る時は太刀として、或る時は薙刀の如く或る時は槍の如く、自由自在に變化して使ひ得るところに特長がある。

擊を發するには大冠りに擊ち込み、或は上袈裟等に擊ち込むのが普通である。

四　講　話

劍道は我が國固有の武道の一つであつて、古い傳統と長い歷史とを保持し、武術として精妙なる發達を遂げたのみならず、其の根柢には日本國民の氣魄と道義とを容れて居る。故に實地修錬を行はしむると共に、之れに卽して講話を行ひ、正しき劍道を修得せしむることに努め、その神髓を會得せしめなければならない。此れ敎材として特に講話を選擇した所以である。

講話の教材内容はこれを大別すれば、訓話的のもの、術理的のもの、講話的のものの三つに分けることが出來る。講話の教材として要目に列擧せられたのは、總括的のものであるから、教授者はより深く且、廣く研究して適切なる指導を行ひ得るやうに努めなければならぬ。特に武道精神涵養に關しては十分意を用ふ可きである。

尙、教材中特に擧げないけれども、審判法、居合、試し切り、劍道逸話、衞生上の諸注意等に就いても簡單に教授しておくがよい。

講話は機に臨み適切なる教材を選んで、而も簡明に行はねばならぬ。

講話教材中には之れを繰り返す必要がないものと、學年の進むにつれて之れを敷衍し、高尙、深遠なる意義を知らしむべきものとある。

斯くて劍道の教育的效果を全うすべきことを期すべきである。

五　稽　古

稽古は劍道教授の主要なる位置を占めるもので、基本動作及び應用動作に於て修得したる技術に習熟し、之れを活用し、應用し、對手の意圖を察知して之れに應ずる技を施す能力を養成すると共に、